

NO. 53  
October '12

# Newsletters

神戸女学院大学  
女性学  
インスティテュート

## 「女性学」との17年

石川 康 宏

私は阪神・淡路大震災直後の1995年4月に神戸女学院大学に赴任し、ここで初めて「女性学」と出会いました。その後今日までの私と「女性学」のおつきあいを、以下に簡単に紹介してみたいと思います。

院生として私が書いた最後の論文は「日米貿易摩擦とアメリカ鉄鋼保護貿易政策の展開」で、当時の私の研究上のキーワードは「日米関係／鉄鋼産業／経済政策」などでした。その私が女子学生に「経済学」を語る中で最初にぶつかったのは「経済社会における女性の地位」という問題です。企業社会における女性の地位や専業主婦という生き方——これらはそれ以前の私の視野には含まれなかった問題でした。

2000年になって本研究所の『女性学評論』に「癒されるべき企業社会の『病』・女性差別」を書きますが、これは私が「ジェンダー＝社会的な性差」を意識して書いた最初の——非常に中途半端な——論文でした。

これをきっかけに同年4月に「神戸女学院大学ジェンダー研究会」を呼びかけます。呼びかけに応じてくれたのは、文学者、心理学者、歴史学者など30～40代の女性たちで、「フェミニズム」の問題意識や到達について、私はたくさんのことを教えてもらいました。

2003年2月には、この研究会で『はじめのジェンダー・スタディーズ』（北大路書房）を出版します。私の担当は「主婦とはどういう存在なのか」（第5章）と「仕事にまつわるジェンダー・ギャップ」（第7章）他でした。主婦論については家族社会学の研究に多くを学び、この頃から労資関係とジェンダー視角の統一をつうじた資本主義理解の深化を意識するようになります。2003年5月には論文「マルクス主義とフェミニズム」を發表しますが、これはマルクスの資本主義社会論と「フェミニズム」の問題提起の関係を、私なりにはじめて正面から論じたものでした。これら3つの書き物は、2004年に出版した『現代を探求する経済学』（新日本出版社）に収録してあります。

2004年に日本軍「慰安婦」問題と出会い、以後、私はゼミの学生たちと毎年韓国を訪れるようになります。これについては、「ジェンダー研究の延長ですか」と問われることもあります。慰安婦問題には女性を性の道具とする男性支配の側面の他、民族蔑視、国家犯罪、「死」を前提とした日本軍の異常な構造などが絡まっており、ジェンダー視角だけではとらえ切れませ

ん。この問題についてのゼミの最新刊は『「ナムムの家」にくらし、学んで』（日本機関紙出版センター、2012年）となっています。

つづいて論文「『資本論』の中のジェンダー分析——『マルクス主義フェミニズム』との関わりで」を2005年12月に發表しました。主にA・クーン／A・ウォルフ編『マルクス主義フェミニズムの挑戦〔第二版〕』（勁草書房）を検討したものです。英米におけるマルクス主義フェミニズムの「古典」と評されたものですが、マルクスへの理解には少なくない弱点が含まれました。そのほとんどは、スターリン流の影響を色濃く受けたマルクス理解を、マルクスその人の思想と同一視したことによる弱点でした。

2007年3月には論文「長時間労働・女性差別とマルクスのジェンダー分析」を發表します。これはマルクスの『資本論』に含まれたジェンダー視角に注目して、「男は仕事と残業、女は家庭とパート」という戦後日本での労働力配置の社会的性差を検討したものです。マルクスには日々の労働力の生産と世代的な再生産を担う労働者家庭の「公」的機能への注目や、ダブルインカム・トリプルインカムの世帯を労資関係の中にとらえる基礎的な視角がありました。高度成長期の財界や政府による「家族」政策が、男性への長時間労働と女性への家庭責任の強要を表裏一体としていた事実の確認は、ジェンダー視角にもとづく資本主義経済の原理的理解を豊富化させるものとなりました。

これらの研究の副産物に、論文「人口変動とマルクスの資本主義分析」があります。2006年9月に發表したもので、歴史人口学の成果に多くを学んだものですが、人口変動を社会システムの段階的發展と結ぶ点や多産多死から少産少死への「人口転換」のとらえ方に、マルクスの歴史論や資本主義分析との深い重なりがあることに驚かされました。2009年には、卒業生へのインタビューを柱にした『輝いてはたらかたいアナタへ』（冬弓舎）もゼミで出版しています。

本学での私の人生も残すところ10年となりました。その間に「女性学」は、私に新たに何を考えさせてくれるのでしょうか。それを楽しみのひとつとして、にぎやかに「余生」をすごしていきたいと思います。

（文学部教授：経済学）



石川康宏 教授

## 連続セミナー「文学の中の女 ―歩く女―」

【第1回：2012年5月25日】……………吉田純子  
●「浮遊する日系少女」

日系アメリカ人作家シンシア・カドハタは、*The Floating World* (『七つの月』)において、強制収容所を出たあとの50年代アメリカで、職と安住の地を求めて、町から町へと漂泊する日系人少女を描く。本講では、彼女の不安に焦点をあてて話した。

主人公オリヴィア・アン・オオサカは、タイトルのウキヨ (the floating world) に込められた二つの意味「浮世」と「憂世」を体験しながら成長する。彼女の自分探しの旅は、同時に、日系アメリカ人のアメリカ社会でのアイデンティティ探求のプロセスでもある。

オリヴィアの自分探しは、祖母ヒサエ・フジタノの死に端を発する。オオサカ一家がアーカンソー州に落ち着く矢先に、祖母は、モーテルのトイレで急死する。オリヴィアは、気分が悪いとの祖母の訴えを無視して、自分のベッドに戻り、祖母をトイレで死なせてしまう。

生涯に三人の夫、七人の恋人をもったという、強烈な個性の持ち主の祖母は、「不幸せで残酷な人間」「赤鬼」、孫いじめをする「つねり屋ばあさん」と作中で表現される。

クリステヴァ風のおぞましき存在の祖母から、オリヴィアは、日記帳と財布を受け継ぐ。日記には祖母の恋のアバンチュールが詳細に綴られ、決して空にならないという「魔法の財布」は、豊穡なセクシュアリティを暗喩する。祖母の死により自らの内に悪を認め、おぞましきものに取り憑かれた少女は、それから解放されるための心の旅に踏み出す。

オリヴィアは、自己解放のために、不安との対峙の場として、三つの場所(養鶏の町ギブソン、ロサンジェルス、アリゾナのどこか辺鄙な場所)を通過する。これらは、少女が人生の深い意味を知るための、パフチン的な「カーニバル広場」——社会・文化的規範を攪乱する象徴的な場所——である。

ギブソンで彼女は、日系人が過酷な労働環境や過去からのフラッシュ・バックに苦しみながら、「憂世」を生きる様を目撃する。ロサンジェルスでの彼女は、保険金詐欺の片棒をかついで車の破壊を生業とする中国系男性と出会い、破壊、違法行為、暴力にまみれた「憂世」の諸相を目撃する。アリゾナで彼女は、実父の幽霊と出会う。彼女の家族を不幸に追い込んだ憎き父親が、自動販売機点検という生前の仕事を、死後も独り寂しく勤勉に続ける姿を見て、彼女は父への憎し

みの感情から解放される。この後、ようやくアメリカ社会への参入に向かうのである。

(文学部元教授：米文学文化論)

【第2回：2012年6月1日】……………孟 真理  
●「越境する言葉と身体―多和田葉子をめぐって」

国境を越える人の移動が常態化している今日、出自と異なる文化圏に身を置く作家たちや母語以外で書く作家たちの活躍が、ナショナルな各国文学の枠組みに揺さぶりをかけています。このセミナーでは、ドイツに住み日独両言語で執筆する作家、多和田葉子を取りあげて、複数言語・文化間の往還が、言葉と世界に対する感覚をいかに活性化し、新しい言語表現を生み出しているかを考察しました。

まず亡命文学・移民文学研究の動向に簡単にふれたあと、多和田の文学的マニフェストともいえる「かかとのない文学」「エクソフォニー」のイメージと概念を確認しました。「母語の外に出る」ことが、異文化への参入ではなく、「境界の住人」として中間地帯にとどまって、母語・外国語双方の規範を揺らがせるいとなみと自覚されており、ここに、移民文学の新たな地平の展望があります。

多和田文学に類出する移動・変身・言語のモチーフは、いずれもこの「中間地帯」の変奏となっています。今回はこれらのモチーフの交錯を、旅をめぐる小説二篇に読み取りました。ちなみにここでの旅人は「かかとがない」ため、大地を踏みしめて「歩く」のではなく、受け身に列車で運ばれたり、躓いたはずみに異次元空間に滑り込んだりします。

一編目の作品として、日本語で書かれた連作小説『容疑者の夜行列車』から、いくつかの場面を読みました。不安、眠り、国境、怪しい同行者、旅の中断や迂回、両性具有、名前の喪失などのモチーフを読み解きながら、「夜汽車」が旅人を固定的アイデンティティから解き放ち、現実を変容させる装置となっていることを確認しました。

二編目の作品として、ドイツ語・日本語の両ヴァージョンをもつ長編小説『ボルドーの義兄』に触れました。ドイツ語・フランス語・日本語が響き合うなかで、漢字やアルファベットの物質性が主人公の記憶や連想の断片をたぐり寄せていく、不思議なテキストですが、そこで幾重にも言語的な「旅」が主題化されていることに注目しました。

多和田作品には、読者を旅に巻き込んで、夢と現実のあわいに引きずり込むようなところがあります。やや慌ただしい講義となりましたが、ご参加くださったみなさまにも、ひとときの浮遊感覚を味わっていただけたのであれば幸いです。(文学部教授：ドイツ文学)

【第3回：2012年6月8日】……………藏中さやか  
●「阿仏尼『十六夜日記』の世界」

セミナー第3回は、日本古典文学作品を対象にした回でした。阿仏尼『十六夜日記』を取りあげ、作品世界を通して鎌倉期に実在した女性の京から鎌倉への旅を辿り、そしてその生き方に想いを巡らせていただけるように、講義内容を組み立てました。

まず作者阿仏尼の生涯を紹介し、現在の冷泉家に繋がる女性で、極めて高い文学的素養を有したことなどを、系図や同時代作品である『嵯峨のかよひ路』『源承和歌口伝』の記述から読み取りました。また作品の背景となる夫が家没後の後継者問題や細川庄などの領有権争いについて、鎌倉期の相続法に対する見解を加えつつ説明しました。その後、『十六夜日記』の全体構成をおさえた上で講読に入り、十四日間の中世東海道の旅程を地図で確認しつつ抜粋本文を精読しました。

文学的関心からは見逃し難い『伊勢物語』をふまえる場面の叙述に対するアプローチの他、今回のテーマ「歩く女」という観点から、作者の旅中の心境を、冒頭文や熱田神宮への和歌奉納、鎌倉入りの場面などの表現から丁寧に考えていきました。

最後に、これまでの研究史に触れ、家父長制強化の中で、阿仏尼は、良妻賢母で、わが子と家のために献身した烈女であるという見方をされた時期もあったものの、現在ではその見直しが進んでいることを述べました。阿仏尼は亡夫の信頼にこたえて婚家のために旅に出た女性であり、その作品はリアルな風景や経験を伝えるもので、旅にあって都人との音信に支えられていた一面を伝えるもの、といった最近の作品評価の一端を紹介して講義の締めくくりとしました。

今回のセミナーのテーマである「歩く」を《旅に出ること》に置換して取りあげた『十六夜日記』。作者は、歩きながら、わが人生を振り返り、都や夫・子を思い、これから進みゆくわが道を覚悟をもって見据えつつ、歌人の眼差しで風景をながめたのでありましょう。訴訟について詳述することのない日記の書きぶりにとまどいを覚えた受講生もおられたようですが、阿仏尼の作家魂を見出したというご意見や、妻や母というお立場からの共感の声を多くいただきました。

作者阿仏尼が亡くなってから、既に730年ほどの時間が流れているのですが、その旅の経験の筆録はみずみずしく、そしてその折々にのぞく心情は現代人にも十分に理解できるものであることを、私自身、改めて考え直す機会になりました。(文学部教授：日本文学)

【第4回：2012年6月15日】……………飯田祐子  
●「モダンガール、歩く」

「歩く女」シリーズの日本近代版として、モダニズム

期の女たちがいかに歩いたか、あるいは歩くことを許されなかったか、ということについてお話しさせていただきました。大正の末から昭和初期にわたるモダニズム期、「歩く」ことは一つの新しい行為となっていました。「銀ぶら」という言葉がありますが、銀座は「散歩街」(安藤更生『銀座細見』1931)として注目されていました。「大臣も散歩する。共産党も散歩する」街と言われています。実はこうした歩くことの流行の背景には、西洋における遊歩者(フラヌール)の姿があります。ベンヤミンは群衆の中を彷徨する人に注目し、『パサーージュ論』の中に「遊歩者」という一節を設けています。代表的な遊歩者は、ボードレールです。萩原朔太郎や梶井基次郎などなど、日本でもボードレールに倣って、多くの男たちが街をふらつきました。

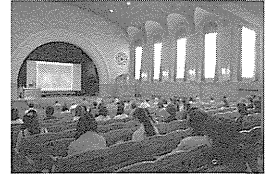
さて、では女性たちにも、そのように彷徨することが許されていたかというところではありません。講座では室生犀星の「幻影の都市」(1921)や堀辰夫の「水族館」(1930)という小説を紹介しましたが、歩く女は異質な存在として描かれ(「電気女」(!)とか、男装の女とか)、物語の最後には高い場所に追いつめられて、落下死させられています。一人で悠々と街を歩く女は罰せられるというわけです。その裏側には「ステッキガール」という、興味深い存在も登場します。これは街を歩く男の「ステッキ」として、散歩の伴をすることを仕事とする女のことです。とはいえ、実はこれは虚構の存在です。佐藤春夫「妄談銀座」(1932)など、ステッキガールを登場させた物語が、この時期いくつも書かれています。書かれているだけで実際には存在していません。歩く男たちに寄り添う存在としてならば、女も歩くことを許されたというわけです。

このように遊歩者の文化はジェンダー化されていたわけですが、歩くことにこだわった女性作家もいます。尾崎翠です。「途上にて」「歩行」「第七官界彷徨」(三作品とも発表は1931)など、題名にも歩くことへのこだわりをはっきり示した作品群を残しています。たとえば「歩行」では、移動を続けているうちに、抱えていた鬱屈が知らぬ間にどこかへ消え去っていくという物語が描かれています。尾崎翠は女性に対する抑圧に非常に意識的だった作家です。そのうえで、歩くことの中に、抑圧に直接対抗して闘うのとは違うやり方で、抑圧から自由になる方法を見出していたのです。聴講していただいたみなさんの中には尾崎翠についてはじめて知ったという方もいらっしゃいました。「歩く女」として、独特の幻想的な世界を示しつつ、実はジェンダーなどの社会構造にきわめて敏感であった尾崎翠を紹介できたことを嬉しく思っています。

(文学部教授：日本文学)

## 2012年度 スケジュール

&lt;4/27 特別講演会&gt;



&lt;5/25 連続セミナー 第1回&gt;



&lt;6/1 連続セミナー 第2回&gt;



&lt;6/8 連続セミナー 第3回&gt;



&lt;6/15 連続セミナー 第4回&gt;



## ■講演会・セミナー（一般・学生対象）

4月	特別講演会 「三美神をめぐる」	神戸女学院講堂
	4/27 (金) 10:35~11:25 講演者：濱下昌宏 名誉教授 参加者：120名	
5月	連続セミナー 「文学の中の女 一歩く女」(全4回/5月・6月開催) JD-104	
	5/25 (金) 14:00~15:30 第1回 「浮遊する日系少女」 講師：吉田純子 文学部英文学科 元教授 出席者：一般14名、学生0名 計14名	
	6/1 (金) 14:00~15:30 第2回 「越境する言葉と身体 一多和田葉子をめぐって」 講師：孟 真理 文学部総合文化学科 教授 出席者：一般18名、学生1名 計19名	
	6/8 (金) 14:00~15:30 第3回 「阿仏尼『十六夜日記』の世界」 講師：藏中さやか 文学部総合文化学科 教授 出席者：一般15名、学生4名 計19名	
6月	6/15 (金) 14:00~15:30 第4回 「モダンガール、歩く」 講師：飯田祐子 文学部総合文化学科 教授 出席者：一般11名、学生2名 計13名	
	受講者数累計：一般58名、学生7名 計65名 修了証交付：13名	
10月	学外講演会 (全2回) 西宮市大学交流センター (西宮北口 ACTA東館6階)	
	10/9 (木) 10:30~12:00 *事前申込不要 第1回 「バイリンガルの子どもたちによる、会話の理解と認知の発達について」 講演者：松尾 歩 文学部英文学科 准教授	
	10/24 (水) 10:30~12:00 *事前申込不要 第2回 「近代に女性天皇が排除されたのはなぜ？」 講演者：河西秀哉 文学部総合文化学科 専任講師	

## ■学生対象プログラム

年間	授業 Cu134(1)(2)「女性学(実践編)」 Cu234(1)(2)「女性学(理論編)」
	インターディシプリナリー・プログラム (申請締切：2012年4月25日(水)・2012年10月17日(水))
7月	第14回「女性学インスティテュート賞」 学生懸賞論文(締切：2012年7月11日)

## ■発行物

10月	newsletter No.53 発行
3月	newsletter No.54 発行
	『女性学評論』第27号 発行

編集・発行：神戸女学院大学 女性学インスティテュート

編集委員：三浦欽也、難波江和英、鶴野ひろ子、米田眞澄(委員長)

編集事務：藤谷悦子、吉永真理子(ABC順)

〒662-8505 西宮市岡田山4-1 TEL 0798-51-8545 FAX 0798-51-8527

URL <http://www.kobe-c.ac.jp/gender/> e-mail: [wsi-o@mail.kobe-c.ac.jp](mailto:wsi-o@mail.kobe-c.ac.jp)